

レジリエンスの形成過程

—— 回想された両親像に注目して ——

葛西 真記子*, 藤井 美沙子**

(キーワード: レジリエンス, 養育態度, しつけ方略, 両親像, 大学生・大学院生)

1. 問題と目的

現代社会では、凶悪犯罪や自然災害、経済的な問題などの回避困難な出来事が数多く存在し、私たちは生きていく中でこのような困難に数多く遭遇する。回避困難な出来事に遭遇した際には大きな精神的苦痛をもたらされ、自殺に至るまで追い詰められることも少なくない。警察庁生活安全局生活安全企画課(2012)の統計によると、2011年の日本の自殺者は30,584人であり、14年連続で3万人を超している。また、厚生労働省(2011)の平成22年人口動態統計(確定数)の概況によると、2010年では年間の死者の2.5%が自殺により死亡しており、癌や心疾患に次いで6番目に多い死因である。警察庁交通局交通企画課(2011)によると、2011年の交通事故死者数は4,611人である一方、自殺者数はこの6.63倍に上り、その深刻さを示している。このような近年の自殺者の多さからも、現代社会には生死を脅かすほどの出来事が溢れていることが容易に想像できる。

地震大国として知られる日本であるが、1995年には阪神・淡路大震災が発生し、死者6,433人を出した。また、2011年には日本観測史上最大級と言われるマグニチュード9.0の東日本大震災が発生した。この地震による被害は建造物の倒壊に留まらず、津波の被害、さらに福島原子力発電所事故に伴う放射性物質漏れや大規模停電などが発生し、日本全国および世界に経済的な二次被害をもたらしている。この大震災は死者・行方不明者が2万人を超えるという戦後最大の大惨事となった。このような大惨事において、家族を目の前で津波に流されて亡くした人や、信じがたい状況を目の当たりにした人は数えきれない。

日本のみならず、地球上各地では大規模な自然災害が発生し、さらに世界各地に戦争やテロの危機も存在する。一生のうちに、このような生死を脅かすほどの出来事に遭遇しない人もいるが、そのような人たちも、日常生活においては怒りや悲しみなどのネガティブな感情を抱くことは少なからずある。親の離婚、子どもや高齢者への暴力、いじめなど生きる上での苦しさは限りなく存在する。村瀬(2011)はこういう先の不透明な時代にあっては心を強くしなやかにもつこと、つまり心の強さが求められ、それもただ強い強さだけでなく、しなやかさを持つ強さが求められると述べている。

たとえば肉親を亡くすという同じ体験をしても、それによる心的ダメージの大きさや、立ち直るまでの時間や過程は個人によって異なる。つまり、このようなストレスやネガティブなライフイベントが、すべての人に抑うつやその他の不適応な状態をもたらすわけではなく、同じような経験をしながらも精神的に不健康の状態に陥らず、心理的、社会的に良好な状態を維持し、適応的な生活を送っている人も少なからず存在する(小塩ら, 2002)。このような困難な状況に遭遇しても適応的に生きる人に着目した概念として、レジリエンス(resilience)がある。レジリエンスとは、困難な環境にもかかわらず、適応する過程・能力・結果と定義される(Mastenら, 1990)。このように、レジリエンスは個人の内的な性格特性としてだけではなく、個人のおかれた環境への適応プロセス全体を含めて包括的にとらえられている概念である(高辻, 2002)。すなわちレジリエンスは適応にかかわる幅広い概念であり、その概念の広さ故、捉え方は研究者によって多様であると言える。そのため、レジリエンスの定義は研究者間でいまだに一致したものがないのが現状である(石毛ら, 2006)。

従来、レジリエンス研究は虐待や貧困など深刻な逆境からの立ち直りを導く要因として着目されていた。しかし、最近では深刻な逆境のみならず、個人の日常生活に果たす役割についても検討する意義があることが指摘されている(高辻, 2002)。現代社会では、さまざまな事件や事故、自然災害、社会不安や経済的な問題など、回

*鳴門教育大学臨床心理士養成コース

**東大阪市役所子どもすこやか部子ども家庭室子ども見守り課

避や解決が困難な出来事が私たちの周りに数多く存在している（小塩ら，2002）。そのためレジリエンスを高めることが、現代社会を生き抜いていくためには必要であると考えられる。心の強さとは、「生きる力」と裏打ちし合っていると見える（村瀬，2011）。

では、困難な出来事やネガティブなライフイベントに遭遇したときに、不適応状態に陥る人と、その困難を乗り越えて適応し良好な状態を維持できる人の違いはどこにあるのだろうか。先行研究によると、レジリエンスには先天的要因と後天的要因の双方が関係していると考えられる（高辻，2002）。つまり、後天的要因が明らかになれば、レジリエンスを高めることにつながり、さらに生きる力を育むことができると考えられる。人が困難な状況に遭遇したり、挫折したりしたとき、絶望して立ち止まり、打ちひしがれてすべてを諦め、否定的な気持ちに身を委ねてしまうか、その辛い状況や過程に耐えて努力や工夫を積み重ねていくことの大切さを学びとるのか、まさしく危機に遭遇することは転機となる（村瀬，2011）。こういった点からも、レジリエンスを高めることの重要性が示唆される。

また、日本におけるレジリエンス研究は、「現時点」に焦点を当てたものは多く見られるが、レジリエンスがいかに形成されていくのかという研究はまだ数少ない。海外では Wyman ら（1999）が両親の養育態度や両親の資質と児童期の子どものレジリエンスの関連を示しているが、日本では、まだレジリエンスと養育態度との関連を調査したものはない。近接した研究としては、小野寺（2009）がエゴ・レジリエンスと幼少期からのしつけとの関連を示している。親子関係の研究としては、児童期の母親の養育態度が大学生の内的作業モデルに影響を与える（椿，2007）という研究や、親子関係は子どもの精神的健康に大きな影響を与えるという研究（鉄島，1993）もあり、子どもの頃の親子関係は青年期のパーソナリティや精神的健康に深く関連しており、レジリエンスが形成されていく過程においても親子の関わりは重要な役割を果たしていると考えられる。

レジリエンスの定義は大きく分けて個人内特性に関する定義、変化の過程に着目した定義に分けられる（石原ら，2007）。これまで述べたように、後天的要因に着目し、レジリエンスを高めるためには、性格特性としてのレジリエンスが形成される過程について明らかにする必要がある。そのため、本研究では小塩ら（2002）の精神的回復力の定義を参考に、レジリエンスを「困難な状況において苦痛を感じながらも、その後の適応的な回復を導く心理的な特性」と定義する。

そこで本研究では、幼少期の親子関係を取り上げ、現在のレジリエンスとの関連を検討する。前述のように、先行研究から親子関係はその後のパーソナリティ（椿，2007）、精神的健康（鉄島，1993）に大きな影響を及ぼすとされ、レジリエンスにおいても Wyman ら（1999）、小野寺（2009）によって養育態度や両親の資質との関連が示されている。しかし、養育態度の中で特にレジリエンスとの関連があると思われる、子どもが落ち込んだ時の子どもへの具体的な対応法や、親自身のレジリエンスとの関連はまだ検討されていない。そこで本研究では、これらとレジリエンスとの関連を検討することを目的とした。

仮説として、次の3つを挙げる。

仮説1：社会的学習理論や親の資質が子どものレジリエンスに影響を与えるという Wyman ら（1999）の先行研究から、回想された両親のレジリエンスは現在の子どものレジリエンスに影響を及ぼす。

仮説2：レジリエンスとは「ストレスによる苦痛から立ち直る強さ」（長内ら，2004）という概念であるため、幼少期のつらい出来事に対し親からどのような対応をされて立ち直ってきたか、といった子どもの頃の親子関係が現在のレジリエンスに関係する

仮説3：Wyman ら（1999）はレジリエンスとしつけ（一貫性、時間の多さなど）との関連を、小野寺（2009）はエゴ・レジリエンスと幼少期からのしつけとの関連を述べている。レジリエンスはエゴ・レジリエンスよりも包括的な概念であるため、日本においてもレジリエンスとしつけは関連する。

2. 方法と対象

(1) 調査対象者

四国地方にある単科の大学、大学院にて質問紙を配布し、回答に不備のなかった258名を最終的な分析対象とした（回収率87%）。

(2) 調査時期

2011年2月～2011年4月

(3) 質問紙の構成

使用した尺度については以下の通りである。

①レジリエンスの測定

レジリエンスを測定する尺度として、小塩ら（2002）の精神的回復力尺度を用い、現在の対象者自身と小学生の頃の両親について回想してもらい、回答を求めた。精神的回復力尺度は、21項目から成り、新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向という3つの因子で構成されている。回答は小塩ら（2002）と同様に「はい（5点）」「どちらかと言うとはい（4点）」「どちらでもない（3点）」「どちらかと言うといいえ（2点）」「いいえ（1点）」の5件法で求めた。

②しつけ方略の測定

小野寺（2009）のしつけ方略の評価を、対象者が小学生だった頃の両親を回想してもらい、回答を求めた。しつけ方略の評価は、10項目から成り、ほめるしつけ、けなすしつけの2つの因子で構成されている。回答は小野寺（2009）と同様に、父親/母親のそれぞれに対して「とてもあてはまる（4点）」「あてはまる（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の4件法で求めた。

③落ち込んだ時の両親の対応の測定

藤井（2012）が作成した落ち込んだ時の両親の対応尺度を、対象者が小学生だった頃の両親について回想してもらい回答を求めた。この尺度は落ち込んだ時に両親からされた具体的な対応20項目と「全体的に評価すると、父親からの対応に満足している」「落ち込んでいることについて、父親に話した」の2項目を合わせた22項目で構成されている。父親と母親のそれぞれに対して「とてもあてはまる（4点）」「あてはまる（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の4件法とした。

3. 結果

(1) 対象者の基本属性

分析対象者の性別は、男性100名、女性153名、性別不明5名であった。また年代に関しては、20代が207名、30代が16名、40代以上が30名、年代不明が5名であった。

(2) 各尺度の検討

1) 精神的回復力尺度

本人の精神的回復力尺度に関する21項目の質問項目のうち、質問紙作成時に不備のあった1項目を除いた20項目を用いて因子分析を行った。因子分析の抽出には、主因子法を用いた。因子数は、固有値1以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性も考慮して3因子とし、プロマックス回転を行った。その結果因子負荷量が低かった1項目を除外した。プロマックス回転後の因子パターン及び、因子間相関、 α 係数を表1に示す。

精神的回復力尺度において、本人、父親、母親の全てにおいて「感情調整」「新規性追求」「肯定的な未来志向」の3因子構造となった。しかし、本人、父親、母親で因子を構成する項目がそれぞれ異なっていた。そのため分析の際には、質問紙作成時の不備により1項目少なかった本人の因子項目を、父親と母親にも適用することとした。

2) しつけ方略の評価

両親のしつけ方略の評価の10項目について、主因子法を用いて因子分析を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け、プロマックス回転を行った。プロマックス回転後の因子パターン及び、因子間相関、 α 係数を表2、表3に示す。両親ともに「ほめるしつけ」「けなすしつけ」の2因子構造となり、項目内容も全て両親で一致した。なお、この因子構造は小野寺（2009）の結果と同様であった。

3) 落ち込んだ時の両親の対応尺度

まず父親、母親それぞれで因子分析を行ったところ、父親と母親の各因子項目は一致する項目が多かった。具体的には「受容・共感的対応因子」では9項目、「責める対応因子」では2項目、「気遣いの対応因子」では4項目、「普段と変わらない対応因子」では2項目が父親と母親で一致していた。このように父親と母親では因子構造がほぼ一致しており、分析の際に父親と母親における「落ち込んだ時の両親の対応」の因子構造を一致させることを目的に、20項目について父親と母親のデータを合わせて再度主因子法を用いて因子分析を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け、プロマックス回転を行った（表4）。落ち込んだ時の両親の対応尺度では $\alpha = .44$ と低かったため、考察では慎重に扱うことにした。

表1 精神的回復力(本人)の因子分析結果(N=257)

項目	I	II	III	
新奇性追求				
①物事に対する興味や関心が強い方だ	.76	-.03	-.08	
①色々なことにチャレンジするのが好きだ	.73	.08	-.14	平均値
①新しいことをやり始めるのはめんどろだ*	-.68	.06	-.07	3.72
①新しいことや珍しいことが好きだ	.57	.21	-.11	$\alpha = .81$
①慣れないことをするのは好きではない*	-.56	.22	-.11	標準偏差
①私は色々なことを知りたいと思う	.56	.20	-.05	1.11
②自分の目標のために努力している	.42	.01	.17	
③粘り強い人間だと思う	.39	-.07	.29	
②自分には将来の目標がある	.33	.15	-.07	
肯定的な未来志向				
②自分の未来にはきっといいことがあると思う	-.04	.88	-.02	$\alpha = .86$
②将来の見通しは明るいと思う	-.04	.81	-.01	標準偏差
②自分の将来に希望を持っている	.22	.68	-.01	.95
感情調整				
③自分の感情をコントロールできる方だ	-.13	.24	.68	平均値
③動揺しても、自分を落ち着かせることができる	.00	.06	.61	3.22
③怒りを感じると押さえきれなくなる*	.10	-.10	-.51	$\alpha = .71$
③その日の気分によって行動が左右されやすい*	-.08	.13	-.50	標準偏差
③あきっぱいほうだと思う*	-.15	.26	-.48	1.20
③いつも冷静でいられるようにこころがけている	.01	-.03	.44	
③気分転換がうまくできない方だ*	-.13	.16	-.34	
因子間相関	II	.55		
	III	.25	.35	
寄与率(%)	25.12	8.63	5.20	
累積寄与率(%)	25.12	33.77	38.98	

○数字は小塩ら(2002)での因子 ①が新奇性追求, ②が肯定的な未来志向, ③が感情調整
*は逆転項目 α はアルファ係数

表2 しつけ方略の評価(父親, N=236)

項目	I	II	
ほめるしつけ			
私の良い所をほめてくれた	.77	-.08	平均値
すごい!すごかったね!と言ってくれた	.76	-.07	3.05
ありがとうと言われた	.75	.05	$\alpha = .84$
頑張れと励ましてくれた	.67	.10	標準偏差
頭を撫でてくれた	.67	.02	.92
けなすしつけ			
私をよく怒鳴った	.00	.80	平均値
私をしかる時たいた	.00	.67	1.93
バカとか頭が悪いとか言われた	.07	.64	$\alpha = .76$
あれはダメ, これはダメと禁止してきた	-.06	.54	標準偏差
私のことを無視した	.01	.50	1.04
因子間相関	II	-.21	
寄与率(%)	27.07	27.09	
累積寄与率(%)	27.07	47.16	

α はアルファ係数

4) 本人のレジリエンスと両親のレジリエンス

両親のレジリエンスを独立変数, 本人のレジリエンスを従属変数とし, ステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った(表5)。その結果, 母親のレジリエンスが本人のレジリエンスを, 被験者全体では3%, 男性では10%説明していた。被験者全体と男性では, 母親のレジリエンスが本人のレジリエンスに対して, 0.1%水準で有意な正の影響を与えていた。一方, 女性のレジリエンスに対して, 両親ともに有意な影響は見られなかった。

5) 落ち込んだ時の対応とレジリエンス

落ち込んだ時の父親/母親の対応の4因子(受容・支持的対応, 気遣いの対応, 責める対応, 普段と変わらない対応), 合計8因子を独立変数, 本人のレジリエンスを従属変数とし, ステップワイズ法を用いて重回帰分析

表3 しつけ方略の評価 (母親, N=248)

項目	I	II	
ほめるしつけ			
私の良い所をほめてくれた	.77	-.08	平均値
すごい!すごかったね!と言ってくれた	.76	-.07	3.05
ありがとうと言われた	.75	.05	$\alpha = .84$
頑張れと励ましてくれた	.67	.10	標準偏差
頭を撫でてくれた	.67	.02	.92
けなすしつけ			
私をよく怒鳴った	.00	.80	平均値
私をしかる時たいた	.00	.67	1.93
バカとか頭が悪いとか言われた	.07	.64	$\alpha = .76$
あれはダメ, これはダメと禁止してきた	-.06	.54	標準偏差
私のことを無視した	.01	.50	1.04
因子間相関			
	II	-.09	
	寄与率(%)	27.07	27.09
	累積寄与率(%)	27.07	47.16

 α はアルファ係数

表4 落ち込んだ時の両親の対応尺度 (N=258)

項目	I	II	III	IV	
受容・支持的対応					
私にアドバイスをした	.83	-.15	.09	-.02	
今後どうすべきか一緒に考えた	.70	.11	.05	-.04	
私の話を聞いた	.70	.09	-.08	-.02	
反省点を考えさせた	.70	-.13	.42	.11	
私を励ました	.66	.12	-.12	-.05	$\alpha = .77$ 平均値 2.60
私を心配した	.49	.18	-.22	-.09	標準偏差 1.06
私に共感した	.47	.38	-.07	.14	
私にいつまでも気にするなと言った	.47	-.08	.19	.06	
特に何もしなかった	-.47	-.03	.04	.37	
私の気晴らしになることをした	.43	.23	.02	.04	
私を見守った	.31	.03	-.22	.22	
気遣いの対応					
落ち込んだ	-.13	.63	.12	-.08	
わざと明るくした	.09	.57	.08	.02	$\alpha = .63$ 平均値 2.14
私を気遣った	.17	.49	-.16	-.05	標準偏差 1.02
私の好きな料理を作った	.17	.45	.06	-.01	
私に落ち込んでいることと関係のない話をした	-.07	.39	.26	.36	
責める対応					
私が落ち込んでいることに対して責めた	-.07	.13	.80	-.10	$\alpha = .80$ 平均値 1.73
私の非を責めた	.16	.00	.79	-.05	標準偏差 .91
普段変わらない対応					
普段と変わらない態度を取った	.17	-.25	-.15	.57	$\alpha = .44$ 平均値 2.93
私をそっとしておいた	-.18	.06	-.19	.48	標準偏差 .93
因子間相関					
	II	.62			
	III	-.08	-.17		
	IV	-.28	-.19	-.12	
寄与率					
		27.42	9.54	3.78	3.73
累積寄与率					
		27.42	36.96	40.75	44.48

 α はアルファ係数

を行った(表6)。その結果, 落ち込んだ時の両親の対応が本人のレジリエンスを, 被験者全体では11%, 男性では7%, 女性では12%説明していた。被験者全体では本人のレジリエンスに対して, 母親の責める対応, 父親の気遣いの対応が1%水準で負の影響を, 母親の受容・支持的対応が1%水準で正の影響を与えていた。男性では, 母親の責める対応が5%水準で本人のレジリエンスに負の影響を与えていた。さらに女性では母親の責める対応, 父親の気遣いの対応が本人のレジリエンスに1%水準で負の影響を与え, 母親の受容・支持的対応が5%水準で本人のレジリエンスに正の影響を与えることが示された。

表5 本人レジリエンスと両親レジリエンスの重回帰分析結果

本人レジリエンス	全体(n=230)	男性(n=86)	女性(n=140)
	β	β	β
母親 レジリエンス	.18***	.31***	n.s.
父親 レジリエンス	n.s.	n.s.	n.s.
R	.18	.31	n.s.
R ²	.03	.10	n.s.
F値	7.91***	9.05***	n.s.

*** $p < .001$ n.s. =not significant

表6 レジリエンスと落ち込んだ時の対応の重回帰分析結果

レジリエンス	全体(n=227)	男性(n=87)	女性(n=136)
	β	β	β
母親 責める対応	-.22**	-.27*	-.22**
父親 気遣いの対応	-.23**	n.s.	-.27**
母親 受容・支持的対応	.20**	n.s.	.18*
R	.35	.27	.35
R ²	.11	.07	.12
F値	10.08***	6.76*	6.16**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ n.s. =not significant

次に父親/母親の対応の満足度を1（あてはまらない）、2（あまりあてはまらない）と回答した群を対応満足度低群、満足度を3（あてはまる）、4（とてもあてはまる）と回答した群を対応満足度高群とし、両親の対応満足度別の本人レジリエンスの平均値、標準偏差を男女別に算出した（表7）。

表7 両親の対応満足度別レジリエンス得点

		対応満足度低群	対応満足度高群	
男性	父親	N	28	63
		平均値	3.54	3.66
		標準偏差	.49	.52
	母親	N	18	73
		平均値	3.36	3.68
		標準偏差	.50	.49
女性	父親	N	32	111
		平均値	3.50	3.50
		標準偏差	.61	.48
	母親	N	27	116
		平均値	3.55	3.49
		標準偏差	.50	.51

本人のレジリエンス得点に関して、父親の対応満足度と母親の対応満足度を要因とする2要因分散分析を男女別に行った。その結果、男性では母親の対応満足度の主効果が有意（ $F(1, 91) = 5.38, p < .05$ ）であった一方、父親の対応満足度の主効果に有意差は見られなかった。また、母親の対応満足度と父親の対応満足度の交互作用は有意ではなかった（表8）。女性では、父親/母親それぞれの対応満足度の主効果、母親の対応満足度と父親の対応満足度の交互作用はともに有意ではなかった（表9）。

また、有意差が見られた男性における母親の対応満足度別レジリエンス得点を以下の図1に示す。

次に本人のレジリエンス得点に関して、父親に話したかと母親に話したかを要因とする2要因分散分析を男女別に行った。その結果、男性・女性ともに、両親に話したかの単純主効果において有意差は見られなかった。また父親に話したか、母親に話したかの交互作用に関しても男女ともに有意差は見られなかった（表10～11）。

6) しつけ方略とレジリエンス

父親/母親のしつけ方略（ほめるしつけ、けなすしつけ）の合計4因子を独立変数、本人のレジリエンスを従属変数とし、ステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った（表12）。その結果、両親のしつけ方略が本人のレ

表8 男性におけるレジリエンス得点と対応満足度の2要因分散分析

	平方和	自由度	平均平方	検定	
父親の対応満足度	.09	1	.09	$F=.36$	<i>n.s.</i>
母親の対応満足度	1.35	1	1.35	$F=5.38$	*
交互作用	.13	1	.13	$F=.53$	<i>n.s.</i>
残差	21.88	87	.25		
合計	1215.24	91			

* $p<.05$ *n.s.*=not significant

表9 女性におけるレジリエンス得点と対応満足度の2要因分散分析

	平方和	自由度	平均平方	検定	
父親の対応満足度	.00	1	.00	$F=.01$	<i>n.s.</i>
母親の対応満足度	.12	1	.12	$F=.45$	<i>n.s.</i>
交互作用	.04	1	.04	$F=.13$	<i>n.s.</i>
残差	36.46	139	.26		
合計	1787.07	143			

n.s.=not significant

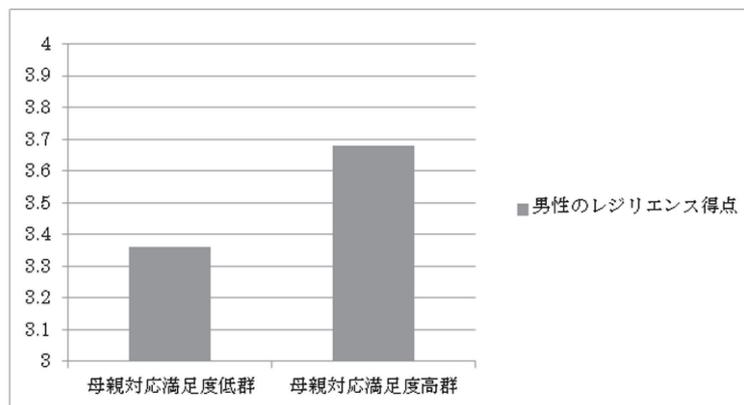


図1 男性における母親の対応満足度別レジリエンス得点

表10 男性におけるレジリエンス得点と父親/母親に話したか別の2要因分散分析

	平方和	自由度	平均平方	検定	
父親に話したか	.30	1	.30	$F=1.18$	<i>n.s.</i>
母親に話したか	.81	1	.81	$F=3.15$	<i>n.s.</i>
交互作用	.80	1	.80	$F=3.10$	<i>n.s.</i>
残差	22.67	88	.26		
合計	1225.89	92			

n.s.=not significant

表11 女性におけるレジリエンス得点と父親/母親に話したか別の2要因分散分析

	平方和	自由度	平均平方	検定	
父親に話したか	.01	1	.01	$F=.02$	<i>n.s.</i>
母親に話したか	.00	1	.00	$F=.00$	<i>n.s.</i>
交互作用	.19	1	.19	$F=.71$	<i>n.s.</i>
残差	35.93	138	.26		
合計	1776.76	142			

n.s.=not significant

レジリエンスを、被験者全体では4%、男性では26%説明していた。全体では母親のほめるしつけがレジリエンスに正の影響を、男性では父親のほめるしつけとけなすしつけが負の影響を、母親のほめるしつけが正の影響を与えていた。母親のけなすしつけはモデルに当てはまらなかった。

表12 レジリエンスとしつけ方略の重回帰分析結果

レジリエンス	全体(n=231)	男性(n=88)	女性(n=138)
	β	β	β
母親 ほめるしつけ	.19**	.54***	n.s.
父親 ほめるしつけ	n.s.	-.33**	n.s.
父親 けなすしつけ	n.s.	-.28**	n.s.
R	.19	.51	n.s.
R^2	.04	.26	n.s.
F 値	8.45**	9.74***	n.s.

** $p < .01$ *** $p < .001$ n.s. =not significant

4. 考 察

(1) 仮説の検証

1) 仮説1

重回帰分析の結果、男性では母親のレジリエンスが本人のレジリエンスに正の影響を与えており、女性では有意な影響は見られなかった。この結果から、男性において仮説1は支持された。つまり、両親の立ち直る心の強さを子どもがどのように捉えるかということは、その子どものレジリエンス形成過程において重要であり、男性では母親のレジリエンスが高いと認識していれば、本人のレジリエンスが高くなると言える。

2) 仮説2

重回帰分析の結果、男性では、母親の責める対応が本人のレジリエンスに負の影響を与えていた。言い換えると、落ち込んだ時に母親から責められたと息子が認知することは、その息子のレジリエンス形成に負の影響があると言える。一方、女性では本人のレジリエンスに対して、母親の責める対応、父親の気遣いの対応が負の影響を、母親の受容・支持的対応が正の影響を与えており、この結果から仮説2は支持された。つまり、落ち込んだ時に子どもが親にどのような対応をされたかを認識することは、子どものレジリエンスの形成に影響を与えるとされる。具体的には、娘が母親から責められた、父親に気遣いをされたと認知することは娘のレジリエンス形成を阻み、娘が母親に受容・支持的対応をされたと認知することは娘のレジリエンス形成を促進することが示唆された。

3) 仮説3

重回帰分析の結果、男性では母親のほめるしつけが正の影響を、父親のほめるしつけと父親のけなすしつけが負の影響を与えていた。一方、女性では有意な影響は見られなかった。この結果より、男性においてのみ仮説3が支持された。つまり、子どもが両親からどのようなしつけを受けたと認識するかは、その子どものレジリエンス形成において重要だと言える。これは男性において顕著にみられ、男性は母親からほめるしつけを受けたと捉えることでレジリエンス形成は促進され、父親からはほめるしつけ、けなすしつけのどちらを受けたと感じてもレジリエンス形成は阻まれる可能性が示された。

(2) 男女差

親のレジリエンスとしつけ方略は、本人のレジリエンスに対して男性にのみ有意な影響があった。また、落ち込んだ時の対応は男女ともに本人のレジリエンスに影響があったが、その影響を与える対応には男女差が見られた。つまり、レジリエンスの形成過程には男女差があると言える。この男女差の結果から、レジリエンスの形成過程において男性は両親に大きく影響され、女性では両親以外の要因も多く関係していると考えられる。石毛ら(2005)の研究では、男性に比べ、女性の方が“きょうだい”“友だち”のソーシャル・サポート得点が有意に高かった。つまり、両親以外のソーシャル・サポートを女性は男性よりも多く受けていると言える。両親以外のソーシャル・サポートを女性が多く持っているということは、女性は男性に比べてパーソナリティの形成過程において両親以外の要因も大きく関係していると考えられる。また、石毛ら(2005)は、ソーシャル・サポートは心の健康に関与しており、レジリエンスの規定要因であることも示唆している。つまり、ソーシャル・サポートとレジリエンスは深く関連すると言える。こういったことから、女性のレジリエンス形成においても、両親以外のソーシャル・サポートが大きな要因として存在すると考えられる。

(3) 対応満足度、両親に話したか

2要因分散分析の結果、男性では母親の対応への満足度が高ければ、本人のレジリエンスも高くなることが示された。この結果より、男性は母親から期待したとおりの対応、またはそれ以上の対応をされると満足度が高くなり、レジリエンス形成が促進されると考えられる。一方、両親に落ち込んだことを話したかどうかでは、男女ともにレジリエンス得点に違いはなかった。

つまり男性では、母親に話したか話していないかという客観的な事実よりも、母親から受けた対応をどのように捉えたかという主観的な事実が、レジリエンスに影響すると考えられる。

森下(1981)は母親の養育態度と子どもの性格についての相関的研究を行い、母親自身の養育態度に関する評定では有意な相関は少なく、子どもの評定する母親の養育態度との間に多くの有意な相関が認められたと述べている。また、森下(1981)は子供の行動に影響を与えるのは、客観的な環境ではなく、子ども自身に認知された環境である、と主観的環境について言及している。さらに戸田(1990)も、子ども自身の認知の仕方が子どもの性格や行動の予測にとって重要なポイントとなると述べている。本研究においても、両親の対応をどのように捉えたかという主観的事実がレジリエンスと関連することが示され、先行研究で述べられていた主観的事実と子どものパーソナリティとの間に関連があることが示唆された。

(4) 子どもへの関わり方

まず、レジリエンス形成に負の影響を与える関わりについて父親、母親別に検討したい。父親の関わりとして挙げられるのは、娘に対する落ち込んだ時の気遣いの対応、息子に対するほめるしつけとけなすしつけであった。母親の関わりでは、息子と娘どちらに対しても落ちこんだときの責める対応が負の影響を与えていた。

次に、レジリエンス形成を促進する関わりについて述べる。父親の関わりではモデルに当てはまるものはなかった。母親の関わりでは、娘に対する落ち込んだときの受容・支持的対応と息子に対するほめるしつけが、レジリエンスに正の影響を与えていた。

これらの結果から、男女別に両親との関係性とレジリエンス形成との関連を検討する。女性では母親との関係において、母親と心のつながりを感じることや、母親が自分の味方であると感じることが、レジリエンス形成に重要であると考えられる。また、女性が父親に気遣いの対応をされたことと認知することで、レジリエンス形成を阻む可能性があることが示唆された。

また、男性では母親が自分の味方であると感じることや、褒められたと感じることがレジリエンス形成を促進すると言えるだろう。これは、母親から褒められることにより、子どもの自尊心が高くなることが考えられる。小塩ら(2002)の研究では、自尊感情とレジリエンスには正の相関があることが示されている。つまり、母親から褒められたと感じることで自尊感情が高まり、それがレジリエンス形成の促進に関わったと考えられる。一方、父親からは直接的に褒められたり、叱られるよりも静かにそっと見守られたと感じる方が、レジリエンスは育まれることが示唆された。

次に、子どものレジリエンスを育むための両親の対応や役割について検討したい。母親は子どもが落ち込んだとき、(息子、娘どちらに対しても)子どもの非を責めるのではなく、(特に娘に対して)その気持ちを受け止めて支持することが大切であると言える。しつけに関しては、(特に息子に対して)子どもが出来ているところを見つけて褒めることがレジリエンス形成において重要と思われる。つまり、母親は子どもに対する母性的な関わりがレジリエンスを高めると言えよう。

父親は、子どもが落ち込んだときに(特に娘に対して)気遣いや動揺を見せるのではなく大きく構えることや、(特に息子に対して)積極的にしつけに関わるよりもそっと見守る態度が大切である。つまり、父親はどっしりと構えて子どもをそっと見守る態度が、子どものレジリエンス形成に重要であると言えよう。

(5) 今後の課題

1つ目に、本研究では回想法を用いたが、年月が経っており回想が難しく、印象が強かった対応についてのみ覚えていた対象者がいたことも考えられる。そのため今後は小学生を対象とし、回想法ではなく現時点での両親像について回答を求めることで、対象者にとっての両親像がより鮮明で正確なものになると考える。

2つ目に、本研究では小学生の頃を回想してもらった。小学生の頃の両親像は、中学生、高校生の頃の両親像と異なることも想像できる。そのため、今後は中学生、高校生の頃の両親像と現在のレジリエンスとの関連について検討することが必要であろう。

3つ目に、本研究では女性のレジリエンス形成過程において、両親以外の要因が大きいことが示唆された。今後、レジリエンスの形成を促進する両親以外の要因についても今後明らかにすることが望まれる。

(6) おわりに

現代社会には終わりの見えない世界規模の不況、大地震のような自然災害、凶悪犯罪など、数々の脅威が存在し、日常生活においてもいじめや身近な人の死など、回避困難な出来事が数多く存在する。蓮井ら（2008）の希死念慮が高いほどレジリエンスは低く、レジリエンスが自殺の防御要因になっているという研究からも、レジリエンスを高めることの必要性が示されている。また、阪根（2009）はレジリエンスを高めるためには、支援者たる大人の介在が必要であり、大人からの生き方の伝搬が大きく影響していると述べており、大人の関わり的重要性を示唆している。そこで本研究の結果から、子どものレジリエンス形成を促進するために両親がどのように関わるのが良いか、また両親に対する援助方法を提言したい。

まずは、母親は子どもに対して上述したような母性的な関わりを、父親は子どもに対して大きく構え、そっと見守るような態度を示すことが子どものレジリエンス形成において重要であると考えられる。しかし、小玉（2010）が指摘するように、その態度を子どもが親の意図するものとして認識しなければ逆効果となることが予測される。そのため、普段から積極的にコミュニケーションをとることで親子間の信頼関係を構築することが、親の意図する態度が子どもに伝わりやすい環境になると考えられる。

学校での対応としては、両親が子どものレジリエンスを促進させるような関わりをする手助けをすることが必要であろう。具体的には、学校で元気よく挨拶をしていた、など小さなことでも連絡帳等を用いて保護者に伝えるということが挙げられる。こうした対応が母親に対しては褒める手助けとなり、父親に対しては子どもの様子を聞いて安心し、そっと見守ることができるようになり、結果として子どものレジリエンス形成の促進につながると考えられる。

教師や子育て支援の専門家などが、両親に対してレジリエンス形成を促進するための具体的な対応について心理教育のような立場で伝えることや、ペアレントトレーニング等を通して親が子どもへの関わり方を振り返り、学んでいくことで子どものレジリエンス形成の促進に貢献できるのではないかと思う。そのためにも、子どものレジリエンスを高めることを目的としたペアレントトレーニング等のプログラムの開発に今後期待したい。

〈文献〉

- 藤井美沙子 2012 レジリエンスの形成過程 — 回想された両親像に注目して — 鳴門教育大学修士論文
- 蓮井千恵子・永田敏明・北村俊則 2008 レジリエンスと罪責感—希死念慮の予測— 心理臨床学研究, 25, 625-635
- 石毛みどり・無藤隆 2005 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連 — 受験期の学業場面に着目して — 教育心理学研究, 53, 356-367
- 石毛みどり・無藤隆 2006 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究, 14(3), 53-64
- 石原由紀子・中丸澄子 2007 レジリエンスについて — その概念, 研究の歴史と展望 — 広島文教女子紀要, 42, 53-81
- 警察庁 生活安全局生活安全企画課 2012 平成23年の月別自殺者数について（12月末の暫定値）
<http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm>
 最終アクセス日, 2012年3月8日
- 警察庁 交通局交通企画課 2011 平成23年中の交通事故死者数について
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02020101.do>
 最終アクセス日, 2011年12月14日
- 小玉陽士 2010 親の養育スキルが子どもの自尊感情に及ぼす影響 — 子どもの認知に焦点を当てて — 日本教育心理学会論文集, 52, 321
- 厚生労働省 2011 平成22年人口動態統計（確定数）の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei10/index.html>
 最終アクセス日, 2012年3月8日
- Masten, A.S., Best, K. & Garmezy, N. 1990 Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444
- 森下正康 1981 養育態度の認知差と子どもの性格に関する発達的研究 和歌山大学教育学部紀要 教育科学,

30, 43-55

- 村瀬嘉代子 2011 こころの「しなやかさ」と「つよさ」 児童心理, 65, 1, 1-9
- 長内綾・古川真人 2004 レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 7, 28-38
- 小野寺敦子 2009 親子関係が青年の無気力感に与える影響 — エゴ・レジリエンスが果たす機能 — 目白大学心理学研究, 5, 9-21
- 小塩真司・中谷泰行・金子一史・長嶺信治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 — 精神的回復力尺度の作成 — カウンセリング研究, 35 (1), 57-65
- 阪根健二 2009 レジリエンスを高めるポイント 児童心理, 63 (5), 461-465
- 高辻千恵 2002 幼児の園生活におけるレジリエンス — 尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討 — 教育心理学研究, 50, 427-435
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究 — 関連する諸要因の検討 — 教育心理学研究, 41(2), 200-208
- 戸田弘二 1990 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Model との関連 北海道教育大学紀要, 41 (1), 91-100
- 椿美沙子 2007 児童期の母親の養育態度が大学生の内的作業モデル及び自尊感情に及ぼす影響について 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 9, 115-121
- Wyman, P.A. Cowen, E.L. Work, W.C. Hoyt-Meyers, L.Magnus, K.B. & Fagen, D.B. 1999 Caregiving and developmental factors differentiating young at-risk urban children showing resilient versus stress-affected outcomes: A replication and extension. *Child Development*. 70 (3), 645-659

The Role of Nurturing and Disciplinary Parenting Attitudes in the Developmental Process of Resilience

KASAI Makiko and FUJII Misako

(Keywords : Resilience, Nurturing attitude, Disciplinary attitude, Parenting, College students)

This study investigates the developmental process of resilience, focusing on the role played by parents' nurturing and disciplinary attitudes. For this purpose, 258 undergraduate and graduate students were administered three questionnaires, assessing their parents' nurturing attitude and disciplinary attitude and their own resilience. Results showed that mothers' resilience had positive effect on resilience in male students, that a blaming attitude on the part of mothers had negative effect on resilience in male students, and that an accepting and supporting attitude on the part of mothers had a positive effect on female students, while worrying on the part of fathers had a negative effect on them. In terms of discipline, praise from mothers and praise and criticism from fathers had positive and negative effects on male students respectively. We conclude that children's resilience can be fostered by supportive and massive attitudes on the part of mothers and fathers, respectively. Further, the developmental process of resilience differs between male and female students and male students are more affected by their parents than female students are.

*Naruto University of Education, Training and Practice in Clinical Psychology

**Higashiosaka City Government Office